

會



報

1959年5月

203

日本山岳會

ヒマルチュリ

登山について

① 装 備

田 辺 寿

今回のヒマルチュリ隊の装備を担当し、改めて数回にわたる先人達のヒマラヤ行の偉大さを思い知らされた。すでにヒマラヤとこと新しくいつても、われわれの頭の中にも、どんな程度のもので、必要にして十分であるか見当のつく位ヒマラヤの問題は日本登山界の中で相当に消化されて来ている。ヒマラヤ登山の装備についても内地の山登り同様質的向上の軽量化が基本である。質的な改良はいうまでもないことだが、軽量化という点において、ヒマラヤがわれわれの間でかなり消化されつつあるといった意味からの軽量化が大きな意味を持つて来ている。すなわち、すでに幾回かのヒマラヤ登山を通じて日本の登山界がヒマラヤに対して、自分自身の判断を持つて、この程度の装備が必要であるという得る状態になっており、今度の隊において機動性が重要視されている点と関連して、余計なものが一つも無くしかも必要なものは全部備えるという方針で装備を整えた。

更に今回、過去のマナスルの大きな隊に対して八人というパーティで最小限どの位の費用で出来るであろうかということも興味の一つであり、マナスルに使用したもので、現在使用出来るものは進んでこれを利用し、更に各個人所有のものまでお願いして動員した。マナスル登山という一生の想い出につながる品物を喜んで提供して下さった方々の御協力で予算以内にどうやら出来上り、感謝の言葉もない。

このように、今回の装備は基本的にいつてマナスルの装備を基準とし、その肩にのつて更に一歩前進を望み、質的な向上と相まつて、必要にして十分なる装備の線を厳しくして軽量化を図つたのである。

次に今度の隊において特に目新しいものを採り上げながらご報告する。

素材的に第一に合成繊維綿（ボンネル綿）がある。これは羽毛に代るものとして、高処服、寝袋、オーバーシューズ、オーバーミットに採り入れた。

合成繊維綿をどうして採り上げたかという点、何より高価な羽毛を使用しなくて、軽く暖かい高処服が出来ないものかというところからこれに着目し、まず高処服の試作を始め、低温室のテストを行なううちにたんに単価の点ばかりでなく性能的にも秀れていることを確かめ得たので自信をもつて採り上げた。

たんに軽いといつても、同じ、若しくはそれ以上の暖かさを保つてより軽くなければならぬのであるが、低温室のテストでは満足すべき結果を得たのである。

始め高処服においては、保温性の問題は第三次マナスルのものより幾分性質が落ちて悪いから、より機動的なものが欲しいという要求から、第一号が一ヤード平方当り六〇匁の合成繊維綿を使用したのに対して、思い切つて一ヤード平方、四〇匁に減らし、着用し易いということを重視したが、その服での結果が第一表の通りとなり、予想以上の好結果に驚いたのである。

この点について第一表より簡単にいえば、羽毛より約二割方軽い服で羽毛と同じ暖かさの服が出来るといふことになる。

このように、合成繊維綿は、軽く暖かいのであるが、欠点として考えねばならぬ点も二、三あると思う。

第一にかさばるという問題であるが、羽毛が130まで圧縮することが出来るのに対して、合成繊維の綿は110であり携帯上芳しくない。また、対湿気の問題であるが、羽毛は吸湿性を持つているので、それ自体幾分湿つてもなお保温能力を持つが、合成繊維綿においては、吸水性を持たないからぬれた場合については問題がある。その際の具体的な性能比較は残念ながら不明である。しかし極く最近、合成繊維の肌着に関する研究として、この種のものはその

自体吸湿性は無いが通湿性は秀れており、湿気を吸い取るのではなく通してしまふという点において湿気に対して優秀な性能を持つというのを聞いたが、そうした性能もあるということは考えられるが、まだたしかめていない。

しかし、ヒマラヤの高い所において湿気の問題は決定的な障害ではないとして、高処服に合成繊維の綿を使用した。

更に欠点として、もう一つ復元性の問題があります。この点に関するテストは、布とんに使用のため、かなり行われているようだが、その結果は余り良くないようである。しかしながら、われわれの使用期間よりして、その不安より低温室のテストに比重を大きく考え使用した。

高処服は合成繊維綿使用の結果従来の如く羽毛が出て困るといつた制約を受けずに、布地が決定出来る。したがって、表地は従来通り防風・防水の観点より、目のつんだナイロン傘地（サククス）を使用したが、裏地には軽いナイロン・タフタ・十五番を使用した。更に、布地が破損しても羽毛の如く飛び散らない利点は、破れ易いオーバーシューズ等にも便利であると思う。

種 類	グラム	平均温度低下率 C/min
ボンネル綿服（上）	八四〇	〇・〇九六
羽毛服一九五六（上）	一、〇四〇	〇・一六〇
羽毛服南極用	一、七〇〇	〇・〇二六

次に特に新しいものとして、試作の域を出ないものだが、マイラーは素材的に全く新しい観点としての保温材として今後に興味の持たれるものである。

正確には、Myre というのはアメリカのデュボンが特許を持つ○・○一二四ミルメートルの厚さを持つポリエステル製の皮膜であるが、われわれが問題にしたのはこの Myre にアルミ箔を真空蒸着させたものである。これを寒対策外線素材として、合成繊維綿を入れた高処服上下、テントフライ、氷河幅カバーとして作つてみた。

結局、マイラーの意図する所は保温用としては、一言に云えば魔法ビンに身をまとうわけである。つまり体内の温度をすべてそのキラキラするアルミ箔で反射させて押返し、体温を外に逃さず同時に外界の冷い温度の中への影響も極力少く氷河上の強い紫外線的作用を、このマイラーを使って出来るだけ避けようと考えて、麦ワラの氷河帽にこのマイラーのカバーを用意した。更に中間キャンプにおいて、休息用として、フライを二張用意した。これは、氷河上のキャンプは日中たとえテント内でも非常に高温でなかなか休息出来ないというので、マイラーのフライによつて強い紫外線をよけて休息しようと考えている。

しかしながら現状の品物では、このマイラーはまだ実用とするには色々な難点があるのも事実である。

ポリエステル製の皮膜を仲介として、布皮にはりつけるために通気性が全くない。また、ガサガサと身につけて不快感が伴い、現状でははりつけの糊に良質なものが無い。ため、はがれ易く、臭気強い等、多くの難点があり、靴等は別として、着衣としては実用にはま

だまだの感がある。しかしながら、これが薄い丈夫な布に直接アルミ箔を蒸着出来るようになることと登山装備の色々なる面に利用出来るものと考えられる。

次にマイラーに関連してオットセイ皮を使った高処靴に触れておく。極地に住む動物の毛皮の耐水、耐雪の自然的優秀性に着目し、オットセイの皮を表面に出し、ボンネル綿、マイラーを組み合わせて、高処靴を作つてみた。重量は一二五〇瓦(第三次高処靴は一四〇〇瓦)で内容は第二表の通りである。

第三表 (外側から)

①	ビニロン # 5010
②	マイラー
③	ボンネル綿
④	マイラー
⑤	フェルト
⑥	ホームウール

第二表 (外側から)

①	オットセイ皮
②	マイラー
③	ボンネル綿
④	マイラー
⑤	オットセイ皮

また同時に、皮を使用せずにビニロン帆布を主体としたものも第三表のような内容にして作成してみた。この靴は皮を使用せず、すべて合成繊維で試作してみた。以上の数種の靴のテストの結果、オ

ットセイの皮の靴が非常に優秀な結果をみせた。

以上高処靴の試作検討に当つてわれわれが問題としたのは、通気性の問題である。これまで、靴の通気性の問題については、通気性が悪ければ良いはずが無いという一般論より、通気性を犠牲にすることはほとんど考えなかつたが、マイラー、ゴム引布を防寒材として使用してみようという意図が通気性の問題とぶつかつた。かくして一部分の無通気性がそれ程決定的なことは思はず、それ以上に完全に通気性の無いものを使用することの秀れている点を探り殆んどの高処靴がその中に完全に通気性の無いものを使用している。

次にテントだが、布としては特筆すべきものは無く、ナイロン・タフタ十五番をテント布地として正式に採用したのと、ビニロン人絹糸が試用される程度である。ビニロン人絹糸は他の用途にはすぐれている点があるが、テント布地としては強度的に弱いという致命的問題が解決出来なければ問題にならないと思う。

型としては、従来通り、ウインパー型高処用二人用六張、普通の二人用五張、流線型三セット六張、六人用一張、丸テント一張、カマボコテント一張、ビバーク用軽テント一張、八人用食堂兼用一張を登録用として携行するが、この中で特に形として目新しいものは、フランスのマカール隊が使用したものをモデルとした流線型の組合せテントである。このテントの狙いは、高処において隊員とシエルバが共同生活に入るわけだ

が、この二つの生活も習慣も異なるグルーパがお互いに色々な意味で邪魔にならぬように、しかも一つのサークルで生活出来るようにするためである。このテントはかなり広いスペースを必要とする欠点はあるが、一つ一つ分離しても使用出来るし、また今後の予定地を考慮してみるに、十分そのスペースがあると思込をつけたことである。また完全にこのテントがセットされた場合の耐風性は非常に秀れているのではないかと考えられる。

燃料関係では、近頃次第に登山用としても使用されたプロパンガスのコンロを関係各方面の非常な御努力のお蔭で試作携帯することが出来た。今更にと新らしくいう必要もないが、プロパンの高処用燃料としての優秀性は、外国の隊に例をみるまでもなく、チヨゴリザ遠征隊もこれを使用し立証している。

今度、われわれの携行するものは、プロパン三五〇瓦入りで総重量一・三キログラムで使用時間は三時間半から四時間位である。

使用する燃料についても色々問題があるが、ボタンが多いと低温で気化しない欠点があるので出来るだけ純粋なプロパンを持つて行きたいと思つたが、逆にプロパンを入れると、輸送途中の高気温で内気圧が高くなり過ぎてボンベに不安があるので、結局プロパン含有率七五％のものを携行することにした。そして、コンロに空気が入孔の大きさを調節出来るよう細工しておいた。

限界温度はマイナス三十度以下であり、同時にプラス四十度においても十二気圧程度であるから、ボンベの条件も含めてわれわれの条件を満してくるものと確信している。

ロープ関係では、主体はナイロンで交つていないが、特に最後にある急な氷のクローアル用として特別なフィックスド・ロープを用意した。これは村木隊長が横森原さんの応援を得て考え、東京製鋼浦田工場で実際のテストを行つて使用することになった。

目的とする所は、特にクローアルの下りの危険をさけるため、ナイロン九ミリをメインロープとしてダブルにして十米(または十五米)毎に六ミリロープで止め紐をつけておき、下降の際、二本のメインロープと身体をカラビナでつなぎ、たとえスリッパしても絶対に止るように工夫したものである。

これは、百米で十キロから十一キロあるが、百米を七本準備し、最後の壁に取りつける予定である。その他にフィックスとして六ミリを三百米、クライミングロープとして九ミリ三十米、十ミリ三十米を各五本用意している。

次にナダレ砲がある。これはテントケースの域を出ないが、前衛隊のトラバース辺りで、落ちかかっているセラックスなどあればこれを落してしまつて安全に通過しようというもので、重量六キロ、大きさ四十センチ、到着距離は二五〇米に及ぶものである。

以上、まとめると、特に興味ある問題について述べたが、その他、酸素筒、フィックスドバー等、

細かい点で色々と新しい装備もあるが、大きなものとして大体以上の如きものである。

この数カ月の準備期間中、色々な意味ですつかり会員各位の御世話になった。

現地に行きました節には、持てる力の総てをあげて、御厚意に応えるつもりである。

では行つて参ります。

② 食糧

山野井武夫

今回のヒマルチュリ隊の特色の一つである軽量化の線にそつて、食糧もまた、無駄な物、余分な物は一切持参しない、軽量化につとめる、ということが基本になつてゐる。食糧に与えられたポーターは四十名以内、このことは必然的に日本より持参する食糧を極力少なくし、主食は可能な限り現地食を採用し、しかも出来る限り奥地で購入するという方針をとらせる結果となつた。ブリカンダキの谷算は一般に貧しい、ポーターをへらすことのみ考えているといざB・Cというところで購入不可能というようなことも考えられるわけである。何が、どこで、どれくらい、いくらで手に入るか、というこの調査を特に先遣隊に依頼し現地供給状況の概要を知ること努めた。

献立は三回にわたるマナスル、および先遣隊等、諸先輩の残された貴重な記録と体験より、栄養と同時に、美味く喰べられる、ということも充分考へて作り、出来上つ

た献立については、住吉ドクター、栄養大学、食糧研究所、等の栄養学者に見ていただき、十二月中旬より発注を開始し年内に大半の品物を集荷した。

持参品はキャラバン往路

B・C 一〇五キロ

キャンブ 二三〇キロ

高処用 六五〇キロ

婦キャラバン 七〇キロ

他にジュース・ベーコン・煙草・ワイン特別食を加えると約千二百

キロある。現地購入に頼るものは、マイタ・アタ・ツアンパ・ギル・ダル・シエルバ・ポーター用煙草等約七百キロであり、持参購入の総量は約千九百キロの予定である。

キャラバン往路食は五日間中アルファ米二食・副食・調味料等があり、現地では米・アタ・マイタにわとり・玉子などを購入し、予定であるがこの間は体力を蓄積し、B・C以高の登攀に充分活躍出来るよう、栄養的にも十分な量の食糧を予定している。B・C食はキャラバン食に準じ、日に一度はパンを焼かせる予定でありまた特別食、会合用酒、ベーコン等の箱を設けてゐる。

キャンブ食は隊員用として二種類、シエルバ、ポーター用各一種を設けた。各レーションの中にビスケットはソーダー、乾パン、せんべい、甘味の四種類を詰合せ、特別食・ベーコン・ジュースの箱を設け単調な食生活に潤いを持たせるようにした。

高処用食糧は食糧研究所西丸氏のプランにより作成、栄養構成上

今までの高処用食糧に比べ、ペミカン・かつおなど蛋白質の割合を多くしてあるのが特色である。この高度では(七、一〇〇米)呼吸商の問題は、カロリー当りと呼と含水炭素の食糧との間に極端な差は認められない、蛋白質は新陳代謝上から良好、最後の壁で相当なアルバイトが要求されること、等よりペミカンを使つてみたわけである。他に冷凍乾燥食品を持参し、各レーションにビタミン錠を加えてある。

婦キャラバンレーションは往路に較べると一寸落しても支障ないので量を一寸少なくし殆んど現地食に頼る予定である。

今回特に試作したもの、西丸ペミカン十六号、食研西丸氏指導により日冷研究所で試作。動物蛋白は乾燥肉粉、植物蛋白のミートン、脂肪は普通のベシカートニン、主成分とし喰べ易くするためにレモンの味をつけ、各種ビタミン類を加え七五グラムを一食分として主にスープに用いる心算である。固型かつおぶしを圧縮したものを作つた、そのまゝ喰べても、だしにしても良く、日本人の好みに合う味である。

冷凍乾燥食品、農林省食研の園芸化学室が日本で唯一の冷凍乾燥設備を有するところであり、こゝでトマトジュースの粉末・牛肉・ホーレン草・白桃・缶桃・みそ・醤油、等を冷凍乾燥致しました。味覚・色・香・ヴィタミン全て元のまゝの状態に急速にもどる点、従来の熱風乾燥に較べて格段の秀

れた食料である。

殆んど物の湿度二%以下に落してあり、熱帯地方へは持参したことがないのに食研の方で保存の点を心配してハイゼックでシールしジュースの缶に詰めて持参するがB・Cで開缶の予定である。

粉末カルピス。水分を大量に取るという点から、キャンブ食における飲料の果す役割は大きく、また、乳酸が食物の消化を助ける、美味などの理由により持参した。

信州みそ。栄養大学の指導で、あまり美味くない八丁みそを止め、信州みそを熱湯殺菌しハイゼックスの二重の袋に入れて持参する。固形ミルク。ミルクの錠剤であり滋養に富み携帯に便利である。粉末バター。バターを乳化させ噴霧乾燥し各微粒子がカゼインゼラチン等に包まれており耐熱性で容易に水に溶ける性質がある。主としてB・C附近で使用するが熱量源調味料として利用度の高いものである。粉末油脂。粉末バターと同様な性質、同様な用法である。粉末ミルクチョコレート。ハネバター。蜂蜜とビーナツバターの混合物でチューブ入り、美味で滋養に富む物である。

クエン酸は炭水化物の分解に必要なものである。現在市販のレモンパウダーは殆んどクエン酸と変らないところから、経費節約の意図も兼ねレモン代りに水と砂糖を加えて飲料に供する予定である。スィートミント、重量軽減のために、糖分が単に甘味として要求される場所においては人工甘味料を使用する。普通の砂糖の二倍半の甘味を有している。包装方面で

はクレハロンパックのコンビーフを試験的に持参する。缶詰に代る包装法として今後普及されるのではないかと考える。

ミーチンダー。動物の肉は殺して一定の時間を置かないと軟らかくならない、ところが種々の物があつて蛋白質の分解を待つことが出来ない場合が多い、そのために今回は積極的に肉を軟らかくする薬品を持参し、にわとり・羊等を美味く喰べる心算である。

今回の食糧の準備状況は以上の如きであります、食糧調達に關しても、会員諸先輩のご厚情あふるゝ御援助、ご指導をいたゞいたことを紙上をお借りて厚く御礼申し上げます。ヒマラヤに参つてからは、皆様の御厚情にお応えすべく充分頑張つて、さらに新しく使用した品物の結果をご報告致します。

③ 酸素、医療

住吉 仙也

酸素は軽量及び能率という点から、酸素呼吸器より酸素ボンベに重点を置き、マナスル以来のボンベ改良と鋼製ボンベの使用という二方法を考慮した。鋼製ボンベについてはドレーガー製のものが参照し、かつ篠田先生を通じて日本製ボンベも検討したが、鋼製ボンベは今後改良使用の問題で今次遠征には間に合わぬため、従来使用した川崎航空のボンベ改良ということにした。

即ちボンベの酸素圧を二〇〇気圧(第三次マナスル隊のときは二

七〇気圧)として能率を良くすることにし、そのため安全弁を融点94度Cのフュゼタルにして温度のより以上の上昇以外破裂の危険を少なくし(ポンベの設計圧力および水圧試験は各々六〇〇および三〇〇気圧であり、摂氏20度で二〇〇気圧の酸素ガスは摂氏一〇〇度で約二八〇気圧になる)またポンベバルブの弁軸パッキングは二段にしてテフロンおよびダイクロを使用し酸素ガスの上および出口を極力防いだ。更に自然漏出認知的のため、すでに炭坑用に用いている如くゴム風船を陰圧にしてバルブを覆った。

この結果ボンベ三本セットした時の使用時間は一分間三立で約六時間半、第一次間二立で約十時間となり、第三次間ヌスルの一七〇気圧の場合と比較して各々一時間及及び一時間半の延長となる。ヒマルびチュリ頂上直下の氷壁登攀における激しい運動量、最終キャンプからの距離および高度を考える時、この一時間以上の延長は大きいと思われる。もつとも高度馴化の程度により酸素の要、不要、あるいは使用時期は変化するが、この度のヒマルチュリ登山では六〇〇〇の米以上のアプローチが長いことと最後の壁を考慮して、最終キャンプ前後のアタック三隊に重点的に使用する予定である。医療用も含めて二〇〇気圧四本、一七〇気圧七本は決して多いことはないと考ええる。医療品は抗マラリヤ剤、ビタミン剤、高山病症状に対する薬品等の必需品は別として、単なる感冒、胃腸病等頻度の高いもの、及び毒蛇、大きい外傷、凍傷等頻度

は少ないが大量の準備を要する疾患に対しては、今次登山の如く余裕の少ない場合と程度携行すべきに迷ったが、決定的な量が予測出来るはずはなく、結局特に重篤な場合以外は一応対処出来る程度の準備をし、包装等を改装して極力軽量、小容量とした。

医学的研究は高度による酸素欠乏と、これに附随する高度馴化の人体に及ぼす反応を主眼にして検査、研究をするのであるが、検査自身がすでにこれらの影響を被り、更に私自身始めての高度であるからどの程度の正確さで行えるか分らない。従来、報告から見てもデーターの正確さを期待するには高所における努力は別として計測の方法、殊に計器が問題であり高所医学（登山医学）の困難さもある。即ち正確、軽量、簡便であり、準備の要点でもある。

このたびは三回のマナスル登山において作られたデーターに つきま 積ねる意味で、心臓及び尿に重点 を置いて行う予定である。心臓特 査には辰野先生の御尽力による特 殊心電計を用いる。高度による酸 素欠乏と更にこれを増加させる運 動中の心臓電流を計測する。また 尿についても酸素欠乏による肝、 腎機能の程度を、最近発達せる簡 易定量の方法で検査する。これら が高度馴化その他により各々如何 なる変動を示すかは更に興味ある ことである。しかし即座に結論の 出るものではなく、詳細なデター の分析が必要であれば、登頂を 目標とする登山隊の一員として、 どこまで計測出来るかは予定出来 ない。

④ 報道及び写真

木村 勝久

今、次はマルチュリ登山隊の報道及び写真撮影担当の一員として私日新聞社の写真部員であるので写真真器材等のことについては先の登山隊の成果をあげた依田先輩を始め諸先輩各位の御援助をいただきこれのことなく幸いしたので初参加者として非常に順を追って申し上げるとまずスチール・カメラ用としては次のとおりである。

スピード・グラフイック

ニコン S3	名刺判	一台
ニコン S2	三五耗判	一台
プリモフレック・スポート	三五耗判	二台
マット	六×六判	二台
以上計六台になります。次に映画用としては十六耗撮影機		
ファイルモ七〇—DL		一台
(ターレット)		一台
ベル モデル六三〇		一台
以上を持参する。		
交換レンズではスチール用として		
エクター一〇五耗		
	標準一本スピグラ用	
ウオーレン サック二五〇耗		
	望遠一本	
ニッコール二五耗		
	超広角一本ニコン用	
ニッコール三五耗		
	広角 二本	
ニッコール五〇耗		

標準 一本
ニツコール一〇五耗
ニツコール一三五耗
望遠 一本
ニツコール五〇〇耗
超望遠一本

以上九本であるが五〇〇耗は今回始めて持参するものである。映画用では広角一本標準二本望遠一本の計四本で、これはどちらのカメラにも使用出来るし、また、アタッシュメントを付けることによってスチールカメラ用ニツコール五〇〇耗超望遠を始め各レンズが使用出来るので便利である。次に感光材料では、

パツク・フィルム
白黒・ネ刺判 五〇打
E・KトライX
白黒 三五耗 二〇〇呎
E・KブラスX
白黒 三五耗 五〇〇呎
E・Kコダクローム・カラー
フジカラー・レバールサル 三五耗 二〇本
フジカラー・ネガタイプ 三五耗 二〇本
E・Kエクタクローム・カラー
プロニー 二〇本
フジカラー・ネガタイプ
プロニー 三十本

以上で枚数にすると約七三〇枚となる。一方映画用は白黒が三〇〇〇呎、コダクローム二〇〇〇呎である。その他現像用薬品器具等一式で目方は正味一〇〇近位の重さになり、梱包すると相当に重くなる。現像薬品の携行は現地でフィルムの現像処理をしてからでない

と送ることが出来なかったためである。送稿については前回マナスル登山隊と同じ要領だが、今回は特に一六枚映画フィルムをスチール写真と共に送稿致し登山隊の状況画を逐次テレビ及びニュース映画で報道し、その後一本の記録映画にまとめる予定である。通信は日程をいうと第一信から第八信あり次のようになっている。

三月二五日カトマンズ発

三月二十九日東京着
四月一日アルガトバザール発

四月一二日東京着
四月五日ニヤク発

四月一九日東京着
四月十日ベースキャンプ発

四月二五日東京着

五月六日東京着

五月一七日東京着

五月十三日ヘルスキャンフ発
五月二八日東京着

五月二五日ベースキャンプ発
六月十日東京着

以上定時便ポストラナーによ

東京間は航空便となつている。

撮景にあつては常時白黒及びカラー用として二台のスチール・

カメラと撮影機一台計三台を携行し登山隊の記録を十二分に描写し

て報道しまた来るべき登山ルート
発見参考の一助となるべき写真を

撮影することも大きな仕事の一つである。またその余暇には各部落

の風俗習慣等も撮つて来たいと、

たカメラ以外に特殊カメラで全

を一台持参する。これは焦点距離一六・三耗F八で一八〇度の超広角レンズでプロニフィルムを使用し、五〇耗直径の円形に写される。このカメラは主に雲の写真撮影に用いられ、風景等を撮影し、今までのない変わった写真が撮れると思う。一方前に列記した超望遠レンズ五〇〇耗によつて頂上への急峻な七〇〇米の岩と氷の壁を登るサミッターの記録的な姿を克明にスチール及び映画におさめることを大いに楽しみにしている。

⑤ 気象観測

松田 雄一

今回の登山はブレモンスーンの登山なのでモンスーンの発生とその動向は最大関心事である。しかしながら第三次マナスル登山の際には、或る程度気圧場と天気の関係が明らかにされたので、今回は天気図の利用が可能な段階になってきた。そこで今回はインド気象庁に依頼してラジオ天気図を放送してもらつたものであり、またSub-continental放送のIAC (Analysis) を受信するなどして何等かの方法により天気図を作成し、第三次登山の際問題となつた上層の谷の通過や、上層の攪乱など悪天候の予報を試み、登山の安全を更に確実にし、僅かしかない登頂のチャンスに適確に握みたいと思つている。

このために、今回は特に遇巻の自記気圧計をアドヴァンス・ベイス位に上げて観測を試みるつもりである。今までの経験からみて気

圧変化の極めて少ない低緯度であるから何の程度役に立つかは疑問であるが、ラジオ天気図を並用することにより或る程度役に立つ資料が得られるものと思う。偏西風攪乱をより精しく研究するためにも是非しっかりと記録をとつてみたい。

偏西風攪乱の追求のためにも、また上層の谷や前線に伴う雲などを確認するために、今回は雲の観測に重点をおき、全天鏡、魚眼レンズなどを用いて数多くの全天写真を撮影する予定である。

この他に従来行われてきた定時観測は今後も継続し、その他に前線などの現象についての知識をうるために現象記事の観測は随時行うつもりである。

一九五三年以来マナスル隊による気象観測は大いなる成果を上げてきたが、今後の気象観測は今までの成果の上に立つものでなければならぬ。今までの観測は気象観測を記録整理し将来の資料とすることに重点がおかれてきたが、今や、その成果を利用して安全に登りうる段階に一步踏み込んでいると考えられるのである。

そして今回の観測により第三次マナスルにおける観測の結果、漸く実体が判りかけてきたブレ・モンスーンのヒマラヤにおける気象の実体を更にはつきりとさせたいものと思つている。そしてその結果が今問題となつていいるジェット気流と日本の梅雨(ちようどブレモンスーン期)の気象は日本の梅雨に関連する)との関係は日本の研究に何等かお役に立つことであれば幸と思つている。この意味からも

出来る限り成果を上げてきたいと思う。

ヒマラヤ登山準備委員会関西支部報告

住吉 仙也

昨年十二月上旬、登山隊員の発表と前後して準備委員会関西支部が置かれた。隊員住吉が酸素および医療担当であり、かつマナスル登山の関係から委員には篠田、徳永、住吉、尾藤の四名が当つた。支部設置に先立ち、すでに十一月より川崎航空に数度赴き、マナスルで使用した酸素ボンベの改良について会社と相談した結果、ボンベの酸素圧を二〇〇気圧にすること、安全弁及びバルブ弁軸パッキングの改良を定め、同時に鋼ボンベについても一考することとした。

十一月末鋼ボンベは今回遠征にはまだ無理なため従来の物を改良することとし、東京本部より川崎航空宛新規注文及び中古品補修を依頼した。また遠征中の医療及び医学的検査については関西で会合すると共に、住吉が上京の上、酸素及び医療担当準備委員辰沼と相談して今後の打合せを行った。

十二月に入り食糧、装備、医療計器の低温低圧テストに住吉が上京、同時に大阪医薬品協会を通じて薬品関係の寄贈を依頼した。隊員発表後、川崎航空と酸素装備について未定の点(例えば炭酸ガス

を混入しない、ガス自然漏出認知のためすでに実用化されているゴム風船の取付等)梱包方法(重量の関係からマナスルの時より一本減らして七本を一梱包とする)納品

期日(一月廿日)等最終的な取定をして、一任することとした。医薬品については年内に集荷すべく十二月下旬集荷の予定が立つた。また東京での寄贈依頼や購入が不便な一部装備品については関西で交渉及び購入に当つたがこれには中尾氏(JAC支部委員)の御尽力に多く与つた。十二月下旬、薬品は大部分集荷完了した上、客積、重量の関係から殆んど全部包装を仕直した。また医療器具についてはマナスルにて使用した物がかなり残つていたので、一部不足品は東京にて集荷することとした。

一月始め今までの集荷品を一括東京に発送し、今後の準備はすべて東京ですることとし、中旬住吉、尾藤が上京の上、医療関係の梱包を殆んど完了した。また酸素関係器具は廿四日川崎航空にて点検し、梱包その他で一部不備な点を補つた上、廿九日東京へ集荷を完了した。なお酸素、医療以外で関西にて寄贈していただいた品物も、この頃はすでに東京にて集荷梱包を完了した。

以上の如き準備の外、辰沼、徳永を中心として遠征中の医学的検査につき、その項目、方法、計器等を検討整備し、あわせて適時登山隊員の身体検査を行った。

新着図書紹介

① ニーゼランド山岳会

The New Zealand Alpine Journal Vol. XVII 1957, No. 44.

The New Zealand Alpine

Journal Vol. XVII, 1958, No. 45. 当会より送つた「マナスル一九五四一六の御礼」として右二冊が届いた。今後当会「山岳」と図書交換を続けることになるだろう。

② アパラチャ山岳会

APARACHA, December 15, 1958, Vol. XXXI, No. 2. アパラチャ山岳会は六月と十二月の二回にジャーナルを発行、その他の月は毎月プレティンを出している。今回その十二月号が届いた。

③ オーストリア山岳会

Österreichische Alpenzeitung Folge 1301, September/October 1958. オーストリア山岳会では年六回、グリーン表紙の二十四頁前後の会報を発行しているが、そのナンバーがいつしか一三〇一号を数えるようになった。

一三〇一号の巻頭は昨年八月四日の十三時五〇分にフランツ・マンドル以下三名によつて初登頂されたハラモシェ(七三九二米)の記事と写真でかざられていゝ。ハラモシェ(四八〇〇米)に第一キャンプを設けた一行は第二キャンプをマニ・ピークII峰の基部(五六〇〇米)、第三キャンプをマニ・ピークII峰を越したIV峰との鞍部(六六三〇米)に更にマニ・ピークIVを越したハラモシェ峰との中間地点に第四キャンプ(六〇〇〇米)を設け、そこから長駈一四〇〇米の高距をラッシュしたものの、長い稜線に自力でキ

★図書紹介★

The Himalayan Journal
Vol. XX 1957 Pp. 176

キャンプを進め最後に全員で登頂を試みるというオーストリア隊独特のタクティクスはブロード・ピークに見せたその方法を更に確実に立証したものととして注目されてよからう。

(松田雄一)

A・エックラーによるエヴェレストとローツェ、横・今西両氏によるマナスル、モラヴェックによるガシャーブルム第二峰、G・マニョスによるムズタグ・タワリ、ワイリーによるマチャプチャリ、シュタインメッツによるアンナプルナ第四峰などが主な内容。それぞれに読みごたえがあるものばかりだが、既にA・JやM・Wなどで知られた内容のも少なくない。マナスルの記事はM・Wのものと同じだが、写真は違つたのが載せられていることは嬉しい。

巻末に近い記事ではシェルパの名前の説明が、前のHCの幹事であつたL・クレネック氏のものとJ・シュベルト氏のものと二通り表示してあつて興味深く、またエヴェレストやカンチへ行つた仲間が毎年集まつている写真があるのも、山の連中は何処へ行つても同じようなことをやると思わせる。本号は予定を遙かにおくられて出版された。その原因が従来の編集者H・W・トビン氏の長逝とい

うことにあつたようだ。シッキム・ヒマラヤに関心を寄せた人はトビン氏の名前が記憶にあることと、思うが、一昨年一月に七十八歳で亡くなつたこのHC創立会員の死は特に惜しまれる。当然のことながら本号にはロングスタッフ翁らの追悼文と写真が収められている。

本号の遅刊はまだしものこととして、前号ぐらゐから印刷、紙質が低下したことは、この会の財政がその主な原因のようだが、甚だ遺憾である。戦前とくに写真印刷の美しいことを誇つていた本書のためにこれはまことに惜しい。次号からはものと姿に復することを望む。編集者はT・H・ブレアムとG・C・バントの両氏。

(T・M)

ヘルギー山岳会誌

Revue D'alpinisme 第七集

本誌の第五集については会報一六九号に小野幸氏によつて紹介されているが、その後第七集が到着したので簡単に紹介しておく。なお第六集(一九五三年版)は残念な欠本。第七集(一九五四年)は第五年度の年報、装幀・用紙その他は第五集説明の通りである。本文八八頁。別に挿入写真版七葉。第五集は一九五一年にフランスと合同で行つたコルディラ・ブランカへの遠征記録を中心とした南米遠征特集の形で内容も充実しているが、七集には遠征記録は一つもなくアンドレ・カペルによるGr. and Capcinの一九五五年に行つた登攀記録が中心記事となつてゐる。ジャン・クジによる登

攀中の壁の写真は迫力があるが、過去に華やかな遠征記録をもつだけに遠征記録のないことはちよつと淋しい。しかしトップ(先頭者)の墜落に対する確保の力学的考察とか、気象の科学的考察(前線などの)などの記事は、われわれにとっては常識となつてゐるようなことではあるかも知れないが、興味深い記事である。そして最後は会務報告、会計報告、書評。書評は会報がフランス語のものに限られてゐる。(松田)

Club Andinista Mendoza

アルゼンチンのアコンカグアの山麓メンドサの街にあるメンドサ山岳会では、隔月にスペイン語の会報を出しているが本会にもかゝらず送つてくれている。このBol-ein Informative 1958年2月3日号はNo. 20となつてゐる。

内容はライブラリー記録、登山記録表、会務報告等であるが、このアンデス山系における記録表は何月何日に誰々が何山に登つたという記録の一覧表であるが、四季を通じて年間に指折りかぞえる程しか頂上に登らない静かな山の多いことは羨しき限りである。(松田)

A.A.C.B. Jahre sbericht

Vol. 52. 1957

スイスにはベルリン、チューリッヒ等に、有名な大学山岳会がある。このA・A・C・Bもその代表的な一つアカデミッシュ・アルペン・クラブ・ベルンでこれはその一九五六年十一月から五十七年十月に至るまでの年次報告であ

る。創立以来五二冊の年次報告を出しているからこの会の歴史は古く、また日本の大学山岳部とは違つて一定の水準に達していなければ入会できないので、この会のレベルは高い水準を保持している。一九五六年度の年次報告にはスイスのエヴェレスト・ローツェを登頂記録を特集として増頁してゐたが、五七年版はもとにもどつてアイト写真四頁、本文二四頁の小冊子である。主な報告の内容は、会が管理しているヒュッテの報告、年度中の主な登山記録表、名誉会員、アクティブ・メンバー、年配者の会員の名簿、役員名簿、物故者名簿等、本会へは一九五一年以後毎年送つてもらつてゐる。(松田)

Jugend am Berg

ドイツ山岳会には日本山岳会に似て学生部に相当する青年青年部があり、一九五五年から発行月不定で年四回でA五版アト十六頁、写真四頁の標記の会報を発行している。今年は既に四巻となつた。内容は主として「Jugendarbeit」の報告であるが、一九五七年三月発行の第三巻第一号には「Zwei im Himalaja」と題してFritz Heber による Eine Besteigung des Trisul 7,130 m. 即ち一九五六年五月十七日にガルワル・ヒマラヤのトリズル第五登を行つた珍らしい記録及びHeintz Schurteimetzのアンナプルナ四峰登頂の記録も収録されてゐる。なおこの会報には毎号Lied beilageと称する山の唄のテキストが、折込まれてゐる。珍らしい(新らしい)

ドイツ山岳会月報

Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins 10. Jahrgang, Heft 3, März 1958.

ドイツ山岳会では既報の年報と共に、一九四九年以来毎月Mitteilungenを発行している。A四版十六頁二十頁で毎月定期的に発行される他十一月には「Sonderausgabe mit Jahresbericht 1956 für alle Mitglieder des DAV」と題して前年の年次報告を主とする二十四頁の別刷を出している。年間で二一五頁程になり、これに項目別の総目録がつく。本会へは三月月づゝ纏めて国立図書館の国際業務部を経て届けられている。こゝで近着(直送でない)ので近着といつても大分遅れる)の今年三月号の内容を簡単に紹介しておく。先ず注目するのはワイリヘルム・サツクによる「シュラギントワイトの足跡」と題した一八五六年のアドルフ・シュラギントワイトによるPanmah 氷河から新ムズタグ・パス(五、六四〇米)へ達した記録の紹介。次いで今年二月十日に不慮の死をとげたナンガルバルパットの勇士、ワルター・フラウエンベルガー博士の追悼。冬季におけるドウムリング・東カンチの登攀記録等がある。(松田)

ARGENTINOS AL HIMALAYA

by Dr. Alfredo E. Magnani,

Fluxá Editor Buenos Aires, 1955, p. 228, photo 30

この程当会よりアルゼンチン山岳協会へ贈られた「マナスル一九五四〜六」の御礼として、標記ダウラギリ登山の報告書が、外務省經由にて届いた。これは同山岳協会会長 Teodoro L. Hantahl 氏の

好意によるもので、一九五四年イパニエス隊長以下十一名をもつてダウラギリを目指してアルゼンチン隊の正式報告書である。イパニエスなきあとは、副隊長格として、最高所まで達したマグナニ氏が筆をとっている。また三十頁にわたって収録されている珍らしい写真資料はいずれも貴重な記録であり、同隊の苦斗の様子が克明に

わかる。内容はスペイン語。なおハンタル氏の言によれば、同書はペロン時代に発行されたものであり、ペロン政変後の今日では入手は殆んど不可能に近い由である。その意味からも本書の持つ価値は高いと思う。(松田)

雲表に聳ゆる峯々

A・エクラ―著
横川文雄訳

昨年十一月スイス山岳財団の理事長フイッツ氏ら一見して本らしい小包が届いた。開ける間もどかし包をほどこいてみると見覚えのある標記図書が出て来た。別便で届いた手紙には「マナスルの立派な報告書と較べるといささか見おとりして気がひけるが今般私達のエグエレスト・ローツェ登山報告書の日本語版が出たから貴会の図書室宛進呈する。これは貴会の

マナスル報告書に對してのさゝやかな返礼である」と記されている。幸いにして日本山岳会には訳者からも発行所である斯界の権威明文堂からも同書の寄贈を受けてないので有難く受領することができた。

日本で出版された本が、わざわざ「山の国」スイスに行くことは有難い話だが、それがまた日本に帰ってくるなんていうのは愉快な話である。山の仲間の友情と礼節の厚さに感謝せざるを得ない。

同書の内容については、邦訳書よりもむしろ、原書の *Gipfel über den Wolken* や英版の *Eye-rest* *Hohe Adventure* を通じてよく知られていると思うし、同隊の隊員であつたロイトルド氏が仕事の関係で長らく日本に滞在していたので、同氏のスライドや話によつて知られており、むしろ逆にそんな日本語版が何時出たのかと知らぬ人の方が多いと思うので、この機会に邦訳本の既に出ていることを更めて紹介しておきたい。

ただ残念に思うのは、同書の原書中にみられるいくつかの隊独特の専門話や固有名詞の邦訳に、説明不充分の点が多岐にわたることである。ちよふと翻訳期間中にロイトルド氏が来日していたのだから、残念なことをしたものである。私達はこうした難解な言葉の正しい意味をつきつめるために、夜の更けるのも忘れてロイトルド氏と話合つた思い出をもつだけに、一層この点を強く感ずるのかも知れない。(松田)

B6版四一三頁、一九五八年六月 明文堂発行四八〇円

日本アルプス

深田久弥著

これは「山の徒然草」だ。字で画いた「名山図譜」だ。

日本アルプスの名付け親ウエス トンのことから、日本人の宗教的登山、戦国時代の峠越えの悲話、近代登山の発展と日本山岳会の設定、初期の山案内人の功績と逸話、今日登山の隆昌期に及び、その間にチョッピリ著者の山歴をおおわせ、日本アルプスの景観をたたえたのち、山に對する深い愛着の絶唱をもつて結んだ総論につづいて一七四枚の写真をつらねる。

「日本アルプスの山々」の部では、北は剣岳から南は光岳まで北中南アルプスの山々三十四座の「しなだめ」。深田さんの手にかかつては、一つ一つの山の姿態、特質、気品がうきほりにされて、その間にむかしの山旅の思い出や、親しい山友や山案内人のすがたや、ふるい時代から明治に及ぶ先蹤者のあとをおりまぜてある。われわれふるい山人には何ともなつかしい限りであるが、ごく最近までの変遷もとり入れてあつて、新しい世代の人たちにも悦ばれるだろう。

剣、薬師、鹿島槍、甲斐駒、北岳などの性格描写はいきいきとしている。人好きのする山繁昌する山とならんで、黒部五郎や黒岳、笠ヶ岳、空木や南駒のような、不遇の山孤高の山を取り上げたたり、古くから宗教登山が盛んかために「登山家に敬遠されたおかげで、原始性が保たれた」御岳のよ

さを認めたり、山峡にひつそりとくらす有峯や下栗をいたわつていゝのも、山に長い年季を入れ、山にわけ込んでいる深田さんらしくてよい。雨の日などに、そこはかとなく繰りひろげて、自分の山旅を思ひかえしながら読むに適した好著である。

沢山の写真をはじめて見たときは、同じような場面が多すぎるような感じがしたが、本文を読みながら一つ一つ眺めて見ると、それぞれに味が出て来た。たゞ北アルプスの一二五枚にくらべて、南の三四枚はすこし少なすぎるように思われるのは、南ア好みの身びいきであるうか。(S・H)

A4版本文四三頁、写真版三四頁他に原色四頁。修道社出版、定価一七〇〇円

ピッケルの思い出

榎 有 恒著

牧少年少女文庫の第一巻として出版された本書は、ことわるまでもなく中学生ぐらいを対象として書かれたものと思う。内容は二部に分れていて、前半には著者の生いたちから始まり、山が好きになつてゆく少年時代、日本アルプスでの登山からアイガ―東山稜の初登攀を初めとするスイスの山登り、それから立山の遭難、アルパ―タとすんで、最後にマナスル登山を成功にみちびくまでの、著者の永い一生の山登りが述べられてある。著者は普段自分のことを余り話さないだけに、古い時代のことで初めて知つたような事柄もちよよいちよいと出てくる。その上

淡々としたなかにシンの通つた文章は、少年ならずとも大人が読んで十分愉しい優れた文章でもある。

後半は山へ登る少年たちのわきまえておかねばならないいろいろの事柄が、こと細かに書かれている。まことに至れり尽せりで著者の人柄と、少年にたいする深い愛情とがにじみ出ている。山の好きな少年たちばかりでなく、大学山岳部員のような人々たちも、一度は読んでみると益されることが多いに違いない。

細かいことだが、十九頁と二十九頁の写真の説明に誤りがあるから、版を重ねる場合は訂正された。(望月)

B6版一七四頁、写真図版多数入、昭和三十三年十一月牧書店発行、定価一八〇〇円

登頂のすぐ後に⑦

沼井鐵太郎

エグエレスト第二第三登頂

一九五六年ローツェ初登頂に成功したスイス隊は、引き続きいて、エグエレストの第二及び第三登頂を果すことができた。同季同一の遠征隊で相異なる二つの山に連続二つ(三つとしてもよい)の八千メートル級登頂を遂げたことは、ヒマラヤ登山史上最初であり、条件の好運にも恵まれたが、それにしても驚嘆すべき快記録であり、さすがに山岳及び登山の国スイスよと敬服するの外の餘はない。さて、エグラー原著・メリック英訳の書物(本編ローツェの項参

(照)によれば、五月二十三日エルンスト・シュミードとユルグ・マルメットの二人は、雪の好状態に助けられて予期以上に早く、サウス・コルからの第二登頂を完了したのである。ヒラリー等が経験したと同じように、今度も山稜が足下から落ちこんで行つたと思つたら絶頂に来ていた、というようなことが書いてある。

「彼等はさし高い尖峰上で、その威厳に撃たれて押し黙つて立つていた。すると矢庭に歓喜の大波が二人を圧倒した。彼等は抱きあつて互の背を擁してたゞいた。何物も眼に見られないほど、嬉し涙が流れ滴つてマスクからひげまで濡らしてしまつた。」

第二登頂といえども、エヴェレストともなれば、その登頂感動は初登と何ら変るところがないことを知る。涙にくれて相擁する動作は、最も自然な本能的の共通のクライマックスであり、かつまた根本的には民族的の差異もないはずのものであらう。

シュミードのピッケル上の掲げた登頂記念旗は、ネパール、スイス及びベルンの二国一都市の分の三つであつた。その掲揚の状は、恰かも自然のまゝの登頂写真のようににセットされてマルメットに撮影された。当日はまことに好晴、殆んど無風で彼等は頂上にあることの快感と眺望とを満喫し一時間近くも滞頂していたが突如として深い雲霧の来襲に遭つた。酸素吸入マスクは二十分間も外していたが、疲労と空腹は明白であつた。雲の絶え間から下方のキャンプをのぞくと、アン・ニマがラヴィオ

リや果汁やお茶やその他うまい物思いをしがし気に配膳していそうに思われた。サウス・コルでもよい食物がぐうぐう鳴る空き腹に備えられていであらう。

登頂感激の後の気持よくほぐれた満足感と見晴らしに続いて、空腹の実感、そしてそれを充たす食物への渴望は、安全な下方へ降つて休息したいという願望と共に、登頂緊張満足を連る常態の移行段階即ち現実の人間慾求であることに間違ひはないようである。

シュミード等は第六キャンプまで下つて、隊長に無言のまゝ抱きしめられたが、疲労の余り天幕にはいつて忽ちの内に自然に眠りについた。翌朝彼等は隊長と隊員グリームとに色々なことを物語つたが、その内彼等が四箇所の違つた場所ので拾つたり欠いたりして地質学上の資料を蒐集して来たということは、専門科学以外には、絶頂石拾いの一般的慣習に関係があつたか無かつたかは、今知るところではない。

さて、第二登頂隊のアドルフ・ライスト及びハンスドルフ・フオン・グンテンは一日おくれで、五月二十四日エヴェレストに第三登頂をした。もし登山に陸上競技のようなスピードを極めて重要視するものとするならば、この日の上下往復はまさに最高記録であつた。即ち最終キャンプからの登行に僅か四時間十五分、七八三三米までの下降にたつた二時間しかかからなかつた。

当日は頂上で全くの無風であつて、二人はちょうどアルプスの一峰に好天を楽しんでいるかの如き

感がしたという。写真は心ゆくまで撮り、フィルムも取りかえ、乾燥果物とオヴオマルチンの食事も十分にとつた、というからは、恐らく東の間に過ぎたであらう登頂感激の直後の精神(神経)平衡、滞頂快感を遺憾なく味つたであらうことが察せられる。少なくとも数週間の苦勞が吹き払われて心が広々としたであらうことである、文字の上でも指示できるのである。

なおフオン・グンテンの撮つた頂上のライストの写真には、旗の巻きつたピッケルを掲げているが、その旗の縦列は上から恐らくネパール、スイスの順であつたと思われる。(一九五七・一二・二)



会 員 通 信

奈良井の正月

古 沢 肇

暮から正月にかけて、この冬もまた雪が少ないうちかと思ひ、夏は暑くて骨が折れるし、春秋には一寸暇が足りない、というところを歩いてみたいと思ひ立つた。具体的には、木曾から飛騨へかけての山奥を縫つて歩く峠越の旅を、

である。ところが大晦日から降り出した暖かい雨が、元日には珍しい大雪になつて、ついにこの旅は木曾の奈良井でストップしてしまつた。しかし、奈良井の宿が滅法良かったので、懐古党の自分らには何より嬉しく、良い越年ができたと思ひこんでいる始末だ。

東京を發つたのは暮の三十日、中央線の混雑を避けて昼汽車でのろ／＼と車窓觀山を楽しみ、伊那からバスで権兵衛峠の麓、南沢鉾泉まで来て泊つた。木曾の旅はまず権兵衛街道からというわけである。広い湯宿はもとより閑散で、夜は星が降るほどきれいだった。

三十一日、権兵衛峠(一、五二二米)を越えていよいよ木曾へ入る。峠は伊那側は炭焼が入つて、売

つていて明い、木曾側は黒木の森である。明暗がこれほどはつきりした峠も少ないだろう。峠の上で雨、雪は一尺余、羽淵へ来たら相憎く奈良井のバスが出たあとである。仕方がないので、これをついでと姥神峠(一、二七七米)を越える。斑雪の中を傘をさして歩く気分は春山のようにである。御嶽も見えず、雪の中に石の鳥居と十数基の石碑とが並んで、古怪な幻想を誘う。宮ノ越から汽車で奈良井へ向うと、鳥居峠のトンネルを抜けただけで、雨は雪に変わつて

いた。

はじめて来た雪の夜の奈良井宿、これは風情があつて良いなどと喜ぶのは早計で、今夜の宿は一体どんなところか、果して泊めてくれるものか、などと漂泊の旅には、いつも心細い気持がつきまとう。このいやな気持は、幸い越後

屋の敷居を跨いだだけで消えてしまつた。「さあ／＼」と奥の座敷へ案内してくれる主人の永井喜平氏は八代目、六十六才と思われぬ若さ、おだやかな物腰が、故人の神田伯龍を思い出させて親しみがある。

暖かい炬燵、年取りの酒、膳の上の木曾の山菜、私はすっかり落着いてしまつた。四方山の話は、壁間に懸る次木さんの油絵(鳥居峠途上から見た賛(にえ)川方面のスケッチ)からほぐれて、田部重治、西岡一雄氏、それに先頃亡くなつた高畑棟村氏のことなども出て、興趣尽きるところがない。

元日は、雪に明け雪に暮れた。真新しい袷の箸で豪華な雑煮を祝つた。

二日、雪は漸く止んで、晴れ間のぞいた。せめて鳥居峠(一、一九七米)でも、と思ひ立つて宿を出ると、主人は私の足指えを案じて、ゴム長靴を調達してくれた。私は二十年来穿き古した鉄靴に、ひどく愛着を感じながら脱ぎ捨てた。峠の旧道はしかし、主人夫婦がしきりに案じたほど困難ではなかつた。頂上は風のためか雪も締つていた。遙拝所から御嶽が見えた。眼下には雪の簾原が長々と横たわつていた。そして、あわよくばと旅を続けたつもりだった境峠の奥は、深い雪に覆られていた。はじめて長大な計画を立てて出発した正月の旅は、こうしてほんの序幕だけでチョンとなつてしまつた。いつかこの続きを、こんどは奈良井を振出しにして、またやつてみたいと思つてゐる。

(三十四年一月記)

秋田駒ガ岳付近

村上 金吾

— 国見温泉から田沢湖へ —

盛岡から橋場線で雲石までゆき、そこからバスで安栖（あずまい）まで。あとは徒歩で雲石川の上流美しい溪谷をさかのぼること約三時間半、途中岩手県と秋田県を結ぶ二級国道の開きく工事をしている安藤組の飯場がところどころにあるが、それもすぎると、あとは人通りもない山道がつづく。導標など不完全で道に迷ったりもしたが、午後六時ごろ国見温泉着、森旅館泊。冬期は休業するので月末には切りあげるところだった。ただ一人の宿泊者である私に心から親切にして下さった。

翌朝六時半出発、横岳を経て男岳近道をのぼり九時駒ガ岳頂上、一面の霧水だったガスがまいてどこも見えない。女目岳展望台を省略してアミダ池から一、五八三米の三角点を経て縦走路にはいる。岩手側はやや暗れてきたが秋田側は相変わらず雲が厚く、ときどき雪をとばしてくる。湯ノ森山、筑森山を経てゆくと、あと山は最後の乳頭山（鳥帽子岳）だけとなる。右下の方に三沼ガ原（せんしやうがはら）の湿原が見える。無数の小沼が群がさまは全く他では見られない珍しいものである。

乳頭山は十二時半ごろ、天気も回復してきて岩手山から八幡平までの連嶺、森吉山、それにけさから歩いてきた国見コースの山々、田沢湖などが見える。

ここまでくればあとは山をおりて蟹場発のバスにまにあえばよいので、心ものんびりする。田代を通る道を右に見送って、ゆつくり黒湯の方へおる。地図の一本松、大釜の温泉マークは無人温泉で、もうもうと湯煙をあげ、多量の温泉が湧いて流れるにまかしているのもつたいない。

一本松の下で下方から四人の男達が登ってくるのに逢う。乳頭山に遭難者があつて捜索にきた人達である。本荘市の二十三才の二女性が一日前登山したまま消息を絶つたとのことである。

黒湯、孫六を経て蟹場温泉にきてみると、地元山岳会の人達が遭難救助のため出動していたし、本荘からは遭難者のお母さんもかけつけていた。思いながら捜索に参加もできず、無事救出されることを祈って午後四時半のバス（蟹場温泉から徒歩十分のところから発車）で生保内（おほない）に向い、途中石神嶺でおりて、田沢湖まで歩いて（約二十分）いつて泊った。（三十三年十月二十二日、二十四日）

南極だより

村山 雅美

三度目の航海は嫌々ながら、とはいえ今回は意外に短く感じてケープタウンへ入港しました。なにしろ日本出港がおくれたので大いに途中をはしよる必要に迫られ、ケープタウンを離れるのも廿四日に頼むと船長にお願いしている次第です。今年の天候、氷の状況はどうでしょうか、そればかりが気

になります。一月の好天を大半へリコプターの組立に費すのが何とも残念ですが残す幾何かの好天、チャンス利用の仕方、或は進むか空輸を始めるかの決定が鍵でしょう。基地生活が始めればこちらのものです。乏しい資材でも愉しい仲間ばかりです。大いにやつて来ましょう。JACの連中、武藤ドクター、平山善ちやん、北村泰ちやん、中村純ちやんなど越冬組の中心勢力として、観測に設営に大いに忙しいことを期待しています。

幸に住みついたら、遙かにヒマルチュリの計画の御成功、それに続く遠征をたえず注視しています。時折電信にのせて御知らせ下さい。鳥居君を通じて文部省の電信に入るはずですよ。

三十三年十二月十八日
ケープタウンにて（折井宛）

第十四回国体登山実施要項

- 一、期日 昭和三十四年十月二十五日から三十日まで（六日間）
二、会場 東京都奥多摩町、塩山市丹波山村（山梨県）雲取山、飛竜山、笠取山
三、集結地 東京都内
四、実施要項

①日程

- A班 開場式場（東京）— 氷川 — 日原 — ヨコスズ尾根 — 長沢春稜 — 雲取山（泊） — 飛竜山 — 将監峠（泊） — 二之瀬 — 落合 — 丹波（バス） — 川野（泊） — 奥多摩湖 — B班 開場式場（東京）— 氷川

南の山靴とスキー用品

登山とスキー行に一番主要な役目を持つ山靴とスキー靴はミナミ独得の技術最高の材料で作ったものをお奨めします。

テント
スキーと山の服装
キスリング
サブザツク

各種取揃



スポーツ用品

ミ ナ ミ

神田小川町中央角 TEL (29) 1359

T. S. FLAVOUR



楽しい登山に スポーツにノグット一杯美味しいジュース
本品は水にとけやすく携帯に便利です。
一箱箱ポリエチレン袋に入っています。

土 谷 商 事

東京都杉並区大宮前6ノ340

登山用具の専門店

好日山荘

中央区銀座西二丁目
TEL 京橋(56) 3600

カクツ進呈

(バス)一日原—富田新道
—雲取山(泊)—飛竜山—
将監峠—笠取山(泊)—
休坂—落合—丹波(バス)—
川野(泊)—奥多摩湖

C班 開場式場(東京)—氷川
(バス)—丹波—落合—日
沢峠—笠取山(泊)—将監
峠—雲取山(泊)—七石山
—水根山—倉戸尾根—熱
海(泊)—奥多摩湖

D班 開場式場(東京)—氷川
(バス)—丹波—落合—二
之瀬—将監峠(泊)—飛竜
山—雲取山(泊)—七沢春
稜—天祖山—日原(バス)—
馬瀬(泊)—奥多摩湖

E班 開場式場(東京)—氷川
—七石山—雲取山(泊)—
飛竜山—三糸湯(泊)—サ
オラ峠—前飛竜—岩岳尾
根—丹波(バス)—馬頭
(泊)—奥多摩湖

②参加人員 各都道府県リッ
ー(監督)一名、選手四名計
五名、一コース各五十名—七
十名

③参加資格 (イ)都道府県体育協
会に所属するアマチュア登山
者 (ロ)都道府県選手選を通過し
た者 (ハ)所定の身体検査によ
る健康証明書を所持する者

④予選方法 都道府県登山団
体において決定する方法によ
る。ただし選手として選出さ
れる者は登山行動に困難を感
じない程度の経験、体力を有
する者に限る。

⑤各種共申込書三通を作成し身
体検査票、参加料をそえ所屬
府県体協を経て、東京都千代

田区神田駿河台四ノ六日本山
岳会、または東京都文京区小
石川一ノノ七六第十四回国
体東京都実行委員会事務局あ
て書留便をもって送付するこ
と。

会務報告

二月役員総会 二十六日

▽場所 本会図書室
▽出席者 松方副会長、理事 浜
野、折井、辰沼、山崎、松丸、
徳久、田村、評議員 渡辺、交
野、望月、監事 諸岡

▽議事および報告

①体協名誉会長平沼亮三氏追悼会
の件、追悼会費を本会より一万円
体協へ支出。
②第十四回国体の件、雲取山と正
式決定。

③図書出版の件、凍傷関係の論文
集の出版をすすめる。
④ランタン・ヒルン登山の件、飯
田山岳会が中日新聞の後援で今
秋計画しており、海外登山審議
会で検討する。

⑤ヒマルチュリ登山隊の件、シェ
ルパ問題は現地に一任する。

三月役員総会 十六日

▽場所 本会図書室

▽出席者 松方副会長、理事 折
井、辰沼、山崎、野田、徳久、
田村、越智、評議員 交野、岩
永、藤木、高山信濃支部長、津
田関西支部長

▽議事および報告

①別項国体登山実施要項を決定。
②三十四年度役員会の件、三十四年
度より、折井、村木、辰沼、松
沢、羽島、石坂、野田、大塚の
八氏が退任する。

③読売で企画中の日本アルプス展
覧会の後援件は保留とする。

④山形支部講習会の件、加藤喜一
郎氏に講師を依頼。

⑤登山学校の件、最近某氏により
本会々員を講師とする登山学校
が計画されているが、本会とは
関係ない旨確認する。

第一九二回小集会

一九五九年二月二十八日八方尾
根の八方山荘で現地座談会を行っ
た。

参加者 信濃支部六名、越後支部
一名、山梨支部一名、東
京支部七名

座談会 テーマ「山岳地方及びス
キー場の変遷と観光開発」
司会 交野武一氏

白馬観光開発KK小沢利一郎氏
の八方尾根観光開発計画を聞き、
開発は避けられないことのように
だ、山も限られた資源だから賢明
に開発してほしいとの意見が多か
った。

座談会が終わってから金坂一郎氏
のヒマルチュリ調査についての話
があつて、翌日は懇親スキーを行
い、支部交歓の楽しい日を過し
た。

「マナスル」一九五四—六 の正誤表

「マナスル」報告書編集委員会
では会報二〇〇号に同書の海外に
おける反響を報告したが、残念

ながらミスプリントが非常に目
につくので、今回また完璧とは
いえないが、正誤表を作成した

(個所)

表紙カバー写真

写真 No. 1

写真 No. 6

写真 No. 22

マナスル地図

3頁7行目

19頁第3図

26頁13行目

95頁上11行目

95頁上13行目

98頁2行目

110頁上6行目

111頁下1行目

126頁下6行目

139頁上2行目

169頁下9段目

169頁下9段目

182頁第1表a

184頁第2表

192頁上13行目

頂上部の形

田口二郎撮影

the northeast side

Bauder Peak

MANASLU GLACIER

フィード

7,854

シン同次官

ダワ・トンダップ(48)

(追加) 三十七年の所に

100ルピー

川上氏

Written Consent

銀行レール

あるので、彼らの

アイス・ハマー

400 (g)

コンデンス・ミルク1

福神漬 1

アルファ一米 六一〇

ギーは羊の油である

(誤)

写真 No. 14 の頂上大

観の方が正しい。

竹節作太撮影

the northwest side

Bauda Peak

TANASLU GLACIER

フィード

7,854

シン同次官補

ダワ・トンダップ(49)

ナンガパルバットを加

える

100ルピー

河上氏

Written Consent

銀行レール

あるので、そうもいかな

い。しかしながら彼ら

の

アイス・ハマー

460 (g)

同上 2

同上 2

同上 一六〇

ギーは羊やヤクから得

られた精製バターであ

る。

マナスル☆一九五二

三

毎分

下のバックキング

ノルアドレナリン

第一〇図

会 員 計 報

井形健一(会員番号四二三九)

三月五日任地鹿兒島において腦
溢血で急逝された。同氏は昭和

十四年慶応義塾大学卒業、享年
四十五歳。
ヒマルチュリ登山隊連絡先
ヒマルチュリ登山隊現地連絡先
は次のとおり

283頁上1行目	Wとなおり	283頁上1行目	Wとなつており
285頁上6行目	概況	285頁上6行目	概況
285頁下9行目	地上観測法	285頁下9行目	地上気象観測法
293頁第30図	8月	293頁第30図	6月
302頁第1表	少くとも1,328時間	302頁第1表	少くとも1,318時間
321頁上13行目	Q. Jour. Soc.,	321頁上13行目	Q. Jour. Geol. Soc.,
321頁上17行目	Hagen	321頁上17行目	Hagen
321頁上24行目	奥橋三男	321頁上24行目	舟橋三男
323頁地図	Langtang Khola	323頁地図	Lang tang
	Syabru		Syabru
	Gosainkund Lank		Gosainkund Lank
	Namula		Namulu
344頁上6行目	No. 292, (1956)	344頁上6行目	No. 292, pp. 38-44, (1956)
344頁下1行目	追加	344頁下1行目	Mita, Yukio. : L'exp- édition Japonaise au Manaslu, Alpinisme ETE 1954, No. 108, pp. 64-68, Paris, (1954)
	Rock, André,		Rock, André,
	削除		剰余
351頁表最下段	JAPANESE ALPINE CLUB	351頁表最下段	THE JAPANESE ALPINE CLUB
英文タイトル頁	B.C.G.	英文タイトル頁	B.S.R.
英文10頁(a)	test anamnesis	英文10頁(a)	test and anamnesis
"(a)	Common Sanitary	"(a)	Common Sanitary
"(b)	Acclimatization	"(b)	Acclimatizing
"(c)	測定	"(c)	測定
261頁上3行目	中性嗜好白血球	261頁上3行目	中性嗜好性白血球
267頁上2行目	(注二八)	267頁上2行目	(注二八)
274頁上11行目	(注二八)	274頁上11行目	(注二八)
274頁上14行目	(注二八)	274頁上14行目	(注二八)



HOSONO
TOKYO

NYLON TENT
SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

Japan Himarayan Expedition,
c/o Post Master of Indian
Embassy in Nepal,
Kathmandu, Nepal.

編集後記 発行遅延をとりもどすべく努力している。本号は会員諸氏の寄稿がかなりにのぼったため掲載出来ないものもあつた。次号にはヒマルチュリ隊の現地便りを中心に出来るだけ早く出した。(山崎)

昭和三十四年五月五日発行

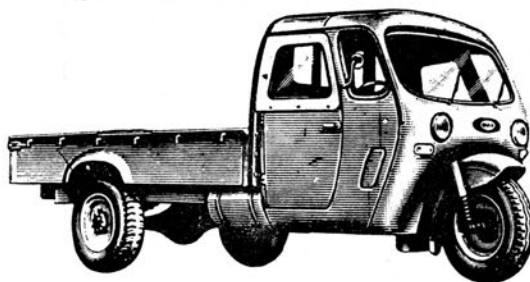
東京 都千代田区
神田 駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会
法人 山崎 安治

編集者 山崎 安治

頒価二十円 電話神田(26)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

ゆったりした3人掛の運転席



乗用車と間違わないで下さい。3輪車でこんなにゆったりしているのです。しかも軽い丸ハンドルですから、長距離輸送でも疲れません。

- ・アンダーフロアエンジン
- ・オーバーヘッドバルブ
- ・AB型2吨積

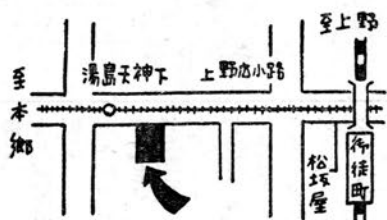
他に1吨車の決定版とご好評を頂いておりますTR型がございます。

山なら絶対!!

オリエント

Hino 日野ディーゼル

も寄りの地区販売会社でご用命をお待ちしております



山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島天神町3ノ19

片桐盛之助

電話 下谷(83) {1794 番
6680 番

たかはし

名人気質の店

本店、四谷、大蔵省横入ル
TEL. (03) 1912

支店 八重洲口第2鉄鋼ビル前
TEL (07) 1560

カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止

あらゆる点で NO.1

合資会社 代表 平林三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8-3740
TEL (76) 5882



秀	山	井
	Ski と 山 の 用具	
プライス・リスト 進呈 電話 東京 (27) 8456 中央区八重洲4ノ1 東京駅・八重洲口ヤシマービル横丁		